

平成 25 年度 第 1 回 釧路エゾシカ対策検討会議  
議事概要

1. 平成 22 年度及び平成 23 年度検討会議で抽出された課題の達成状況について

- ・資料 1 平成 22 年度及び 23 年度検討会議で抽出された課題の達成状況

2. 調査結果等の報告について

- ・資料 2-1 冬期における採食状況調査 実施結果
- ・資料 2-2 エゾシカ個体数カウント調査 実施結果
- ・資料 2-3 定点観察によるエゾシカ行動調査 実施結果

座長	調査の結果から、越冬期は丘陵地でシカの影響が大きく、高層湿原では昨年と今年は多雪の影響からか大きな影響は見られていないようだ。
委員	夏場の被害は把握できていないか。冬場の踏み荒らし面積などから実際の植生ダメージはわからないか。
座長	北大の富士田先生が生態学会誌に論文を書かれているのが、夏の低層湿原内の影響を示した唯一の例だろう。高層湿原についての夏の影響は、まだあまり情報がない。
座長	基本的な認識として、越冬地の中心は丘陵地の森林であり、冬期は丘陵地で影響が大きい。しかし、夏期の湿原内部でかなりヌタ場があるとか、大島川流域では代償植生に変化しているという例も報告されているので、その影響は調べなければならない。

- ・資料 2-4 空中写真からのシカ道判読 実施結果
- ・資料 2-5 エゾシカ捕獲適地検討調査 実施結果

委員	確かに 2004 年から 2010 年にかけて増加していることは分かるが、2004 年の時点でもすでにシカ道がある。2000 年の頃、自然再生事業の中でシカの食害はあまり考えていなかったと思うが、シカの問題が湿原の中で起き始めたのはいつ頃と考えればよいか。
座長	1990 年、1995 年あたりを基準とすればいいと思う。 写真判読についてはシカ道が残りやすい環境と残りにくい環境があると思うが、シカ道の増加により少なくともシカが増加したことは評価できるだろう。ただし、シカの生息密度が低下した場合にどのようにシカ道が減少していくかは解明されておらず、密度低下の指標としては扱いづらい。
座長	真っ先に捕獲試験として手をつけられるのは達古武地域であり、シカの密度が高いので囲いわなが適する。ただ、間伐を行わないときはシカが集まらない可能性もあるので、ずっと同じ箇所と同じ方法で捕獲し続けられるとは限らない。そのため、囲いわなだけでなく他の手法も試して、状況や場所が変

	わったときに違うカードを切れるようにしておいたほうがよい。
委員	道道 1060 号線における流し猟式シャープシューティングは、今すぐでないにしても実施する方向で検討はするべき。道路閉鎖は調整が難しいが、地元と調整しながら考えてみればどうか。

- ・資料 2-6 釧路湿原におけるエゾシカ生息状況調査の概要
- ・資料 2-7 釧路建設管理部管内エゾシカ事故対策検討業務（抜粋）

委員	<p>前回の会議でもデータを出したが、平成 23 年度、24 年度に自衛隊のヘリコプターを用いて調査した際には、南部のほうではあまり見なかった。これは今回の環境省の結果と同様であった。</p> <p>宮島岬とコッタロでは平成 22 年度と 23 年度で異なる生息状況が確認された。年度や条件によって生息状況が変化するものだと感じた。</p>
関係機関	<p>釧路建設管理部でも道路の事故が増加していることを踏まえて、交通事故対策を検討するための調査を始めている。エゾシカの交通事故は道道・国道合わせて年間 2300 件ほど発生しておりそのうち 35%が釧路根室管内で、平成 23 年度はその前の年度と比較して 232 件増加した。ただ、鶴居で対策を考えたが、道路のわきがすぐに私有地ということもあり、なかなか対策が取れない。今回の資料にはないが、浜中や根室の方でも対策を検討しているので、今後とも情報を共有していきたい。</p>
委員	湿原内のシカについて。積雪が多いと少ないという認識か。
座長	ヘリコプターを使用した調査では、特に雪の多かった年には、湿原内部にほとんど足あとや痕跡がなかった。採餌する際に雪が邪魔になるのではないか。
事務局	標茶町で、丘陵地でのシャープシューティングをしていたが、雪の少なかった平成 22 年度はほとんど捕獲できなかったのに対し、雪の多かった平成 23 年度には多く捕獲できたという事例がある。

### 3. 平成 25 年度事業案について

- ・資料 3-1 平成 25 年度エゾシカ採食状況調査 実施方針（案）

事務局	植生保護柵は、2m ほどの垂木を刺してネットで覆うような簡易なものを想定している。冬期も設置したままを想定しているが、耐久性などを確認しながら実施していく。
座長	湿地帯で水位が上がったり、大水が来たりするので、植生保護柵がどれだけでもつか分からない。最初から永久区とするような考え方よりも、1 年目は調査デザインの検討と位置づけるべき。
委員	こうした調査は非常に重要であるのでやるべき。ただ、ヌタ場やシカ道が植生群落にどれほど影響を与えているか、ということを定量的に把握するには、

	もう少し広いエリアで調査区を設けたほうが良いと思う。空中写真からヌタ場等を評価するなど。
事務局	予算や労力が問題となるが、空中写真を使用するということはコストもそれほどかからないと思う。また、シカの捕獲を考える際、集まりやすい場所、実施しやすい場所で行うのは当然としても、例えば植生への影響が大きい場所でやるということも考えられる。何をどの程度調査するのか、必要なのか、という考え方についてご意見をいただきたい。
座長	私はこの調査計画を見たときに、高層湿原にプロットが偏っていると感じた。そこで提案として、低層湿原は富士田先生らの研究で評価されているので、今回は高層湿原の影響を重点的に把握することを目的に調査し、これらを明らかにした上で、長期的なモニタリングサイトを再検討するというところでどうか。
事務局	現場を実際に歩いてみると、低層湿原よりも高層湿原のほうが見えやすい影響が出ていること、希少種に影響がある可能性が高いということで、高層湿原に比重の高い調査デザインとした。丘陵地において定点プロットを設置していない点は欠けている部分で、今後検討したい。ただ、定点プロットの設定では、可能な限り異なる植生で設定するという事を考えており、高層湿原だけではなく低層湿原にもプロットを置くイメージである。
座長	調査区は、草丈が高いところは 2m×2m、ミズゴケ湿原のような箇所では 1m×1m をたくさん設置するなど使い分けた方が良い。 本日は残念ながら富士田委員と新庄委員が欠席されているので、機会があればお考えを聞くことが良いと思う。

・資料 3-2 平成 25 年度エゾシカ試験捕獲 実施方針（案）

委員	間伐材の堆積地を、捕獲に有利となるよう伐採箇所より奥に設定することは可能か。可能であれば、伐採業者に、これくらいだったらいいとか、面倒くさいか、ということは聞いておくことも今後のためにやってみてほしい。
事務局	間伐材の搬出はできるだけ経費をかけない方法で行うのが基本だが、1700本の材が出てくる予定なので、堆積場所は複数必要だろう。囲いわな予定地に持っていく必要が生じるかもしれない。いずれにしても、囲いワナと両立できるような施行を考えていく。 予算次第では、例えば枝条を回収してくることも業者にお問い合わせできるだろう。
座長	捕獲を行うには餌付けが成功するかという点が一番重要な点。達古武で今年度実施してくという方法については問題ないと思う。
座長	有効活用について、北泉開発さんにも前向きにご検討いただきたい。
座長	ワナ以外の手法として、何か検討できるか。

事務局	シャープシューティングやくくりわなが考えられる。枝条の発生状況、エゾシカの餌への誘引状況などを見ながら、最適な手法を検討しながら行うのがよいと思う。
委員	1700本もの材が出るならば、餌が相当発生すると思う。自然再生という視点から考えても、間伐によって逆にエゾシカの繁殖力を上げてしまうようではまずいので、そうならないやり方を検討してほしい。
座長	もしも枝条をその場においてきた場合に、どれくらいシカが集まっているのかを調べるためにカメラの設置くらいはしておいたほうがいい。 達古武について大筋はご提案の方向で、また、囲いワナでできないところをどうやって捕獲するのかということについては、違うカードも検討するというところでお願いします。

・資料 3-3 エゾシカテレメトリー調査について

座長	テレメトリー調査については、平成 26 年度以降に実施する方向とのことだが、可能ならば今年度に達古武で捕獲した個体について一部試行するということ。
委員	Iridium 型 GPS テレメトリーならば、測位間隔を遠隔で変更することができるので、季節移動と日周行動の双方を取得することができる。
座長	テレメトリー調査で何を把握したいのかによって、測位間隔などが決まってくるだろう。まずは季節移動を把握したいが、捕獲適地を知りたいければ（測位間隔を短くして）日周行動を把握する必要がある。
委員	昼と夜の居場所を知りたいだけなら測位間隔は長くてよいだろうが、移動経路上の何かの影響を把握したいのであれば測位間隔は短くないといけない。
座長	釧路湿原を利用している個体群がどのような個体群なのかを把握することが重要だ。そのためには、夏に捕獲できる群と、冬に捕獲できる群に対してテレメを装着して放すということが重要。そのうえで、昼と夜の生息地をしっかりと抑えるということを提案したい。
委員	支笏湖では延べ 30 個を装着して、やっと色々なパターンが把握できた。釧路湿原くらいのスケールと価値のある国立公園ならば、世界的な水準から考えると 50 や 100 は必要。そこまでできないとしても、1 箇所でも 5 個はつけたい。また、コッタロの道道 1060 号線でのシャープシューティングなどを行うのであれば、建設管理部で装着を検討されてはどうか。
事務局	現在の予算だけでは数個がやっとなので、色々と知恵を絞っていきたい。
座長	ご提案のあったように、道道沿いの対策を含めてぜひご協力をいただければ。資料で考えると最低でも 25 個で、現地実的な中でご検討いただきたい。

・資料 3-4 エゾシカ捕獲体制構築モデル事業の概要

座長	北海道で実施される捕獲はいつ頃実施することでお考えか。
関係機関	まだこれから考えるが、1月か2月頃を予定している。場所は検討中だが、コッタロ周辺が有力である。
委員	時期的に実施可能ならば、右岸堤防も候補地となるだろう。ただし、ここは12月までで、積雪があるとシカはいなくなる。
座長	場所や時期については、ぜひ環境省と調整しながら、効果的に実施していただきたい。役割分担をして、全体にシカの湿原への影響を下げていくということをお願いしたい。

4. 釧路湿原生態系維持回復事業計画（仮称）（試案）について

・資料 4-1 釧路湿原生態系維持回復事業計画（仮称）の検討について

委員	生態系維持回復事業は、自然再生事業と関係する形で進むのか。自然再生協議会には、何らかの報告はするべきだと思う。湿原再生小委員会で検討するような形になるのか、報告だけにするのかという点についても整理するべき。
座長	ある程度方針が定まったら、計画を作る前に自然再生協議会の方で報告する、または一部議論をしたほうがいだろう。
事務局	自然再生協議会や小委員会での報告等については了解。 現在の自然再生全体構想には、シカという言葉がひとつも入っていないので、そこに何かを書き加えることも今後検討したい。
座長	以前森林再生小委員会に関わっており、雷別と達古武をモデル地区として実施してきたが、当初からシカの影響は確認されていた。こうしたことから、シカ問題が一言も入っていないというのは不思議。協議会の方でも考えていくことが重要だろう。
事務局	自然再生全体構想は10年ごとに見直しを行うこととされており、予定どおりなら2015年に見直すこととなる。
座長	全体構想の見直しについては、金子委員と中村委員によろしくをお願いしたい。

・資料 4-2 釧路湿原生態系維持回復事業計画（仮称）（試案）

座長	釧路湿原自然再生事業と同様に、ラムサール条約登録以前の状態を目指すということは、1980年代以前というイメージでよいか。そのあたりはいかがか。
委員	異議はない。その年代のデータをきちっと収集しておくことが大事だと思う。例えば、先程のような空中写真の判読結果も、その年を基準にデータ収集すべき。
委員	古い空中写真は米軍のもので1945年などがあるが、きっちりハンノキの拡大を解析したものは、77年、80年、85年あたりだろう。

座長	道の特定計画とのリンクについてはどう考えるか。
関係機関	「エゾシカ保護管理計画との整合をはかる」ということでよいと思う。
委員	この計画はハンノキバージョンなど、別のものは別に作るものなのか。自然再生事業から考えると、ハンノキの拡大は大きな問題で、エゾシカだけがここに入るのがバランス的にどうかと思う。
座長	今回はエゾシカ対策のために計画を作るが、見えるようにハンノキ林の拡大も問題になっていると前段に書いている。これが事業内容として読み込めるようにしておけばいいのではないかと思う。
事務局	計画は場所毎に作るので、ハンノキ対策について釧路湿原全域を対象として生態系維持回復事業で実施することになれば、この計画に書き加えることとなる。しかしながらハンノキ対策はすでに自然再生事業で行っているので、そちらの枠組みでやるのがよいと考えている。
座長	<p>目標の部分については、知床でもかなり長期目標を掲げている。現時点では、短期的にある指標をここまで減らす等とは書けないので、まずは長期目標で良いだろう。</p> <p>安全性の高い捕獲手法の開発という点がとても重要であると考えている。湿原は冬期のレクリエーションが盛んだが、これらと共存できる仕組みを検討して欲しい。また、6-3のところ、湿原群落の改善手法の検討のような項目を入れておくと良いのではないか。</p>